

30

29

28

27

26

25

24

23

22

21

20

19

18

17

16

15

14

13

12



リ 5  
112  
1

荒  
古  
事

武江年表

1

説

# 武江年表

江戸書鋪

青藜閣



不<sub>題</sub>

X

## 武江年表序

龍泉大阿之座。其豐城也。蔚紫之末。騰跨斗牛之間。其威靈如此。而終山於石函。且雌雄似姪。以何顯晦。豈聊。在哉。隆然其至。復本正於延平之津。則生滅可無知。

矣。其寔一。益見矣。由是欽之嚮  
似可怪也。即足泉阿之威。  
靈可以傳于萬古而不磨滅。而  
顯晦之窮閑係。為家大矣。豈翅  
多。凡物之至。自有有其  
數存焉。何啻更生失滅哉。  
友人齋藤月岑。亦贊之。

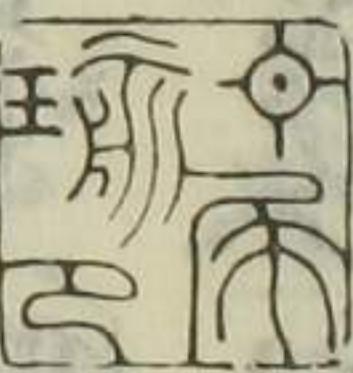
着書三千種。既行于世。今  
又著武江年表八卷。今  
為雌雄。先取其於四卷。梓  
之其為幸也。自慶。尤韙鞬  
迄于今日。大之天矣。地妖坊  
街。沿革。世然之。遺流。物  
之權輿。事之興廢。小之。

人主生卒。神佛之啓龕及  
風德似。读称玩威具。徑四羅  
不遺。攘按尤効。凡二百年來  
之事。讀一注一束。隨求隨  
在。族若更其易。然後更無  
繼。豈無繼哉。事勞歎掌。操  
觚不苟。退待末日耳。其至

如象阿復。匝。羣鱗挂沙。彩  
光射波。以。生羨。全。之美。  
其功可念。知矣。笑列此編  
之。誰。當。以。待。末。日。若。古。而  
毛。雌。雄。相。匹。傳。子。多。古。而  
古。朽。也。其。何。夏。之。頃。  
日。剗。剗。竣工。發。乞。卜。吉。仍。舊。

貫乞序。朱亦不敢辭。便題  
蓋辭。以為延平前之奇云。  
嘉永二年。屠惟正墨。三月  
乙亥。

荊山陣人涼瑜



大千若戰驅。觀鯨依扇盤。  
輿致太平。竊賊敗孫謀。臣別  
國日光。高照海東城。  
試神効。羅昇收棺。二十年  
間不動兵。官家今日真無

事袋處高歌唱太平  
四月十七日作二首

右ニ絶句古文化ニ亥夏

日光宗廟弔忌ニ辰鵬齋翁因翁  
之作を親筆取以贈先考やう取  
以弁於卷首月峯誌

提要

○慶祝昌呂降臨奉の代光世ふ被り毅下の萬昌日下陽せり此がふ  
避酒僻境の人々とも千里を遠へゆせまと厥佳廉を省厥慶大と  
作くとて鄉曲父祖の名所圖會あ門す彼親の狂歌とし次ふ余う  
歲事記を總じて示導引とし再此緝をか一村淳豊壤のあり  
至矣極華の梗概を初づ一しむの一助とし

○出偏りし載る所へ中人以下の耳目ふ解るととえふにて地理の沿革  
或ら訪問の風俗事物乃備要ホ至るまで獲て不謬之德也素う  
公迎乃御事ハ例ひ初づたふあはれたる傳聞せり事も餘れ  
あり漏せり

○是より以來新地を撰むを准彦列原の屬地を限て有ふ種  
寄社民居も地を賜ふて新小剣一或ひ幕般の者ふ置てて廢を  
署すするの類果てねふつゝい故升見寧ふもこひて一二を

記  
獨細の事さそへあふ漏もせり

○忠臣、孝士、貞婦、忍女のれ、恐賞ちんしやうを賜たまり、その褒美ほみを授じよけられ、  
古く漸編あづくこひへん小役ごひきせり

○韵士墨客は筆の際其代有るの事沒卒の事も見えうる  
所をみて一々考へ得す貴人らすへ様りて多くへ漏れぬ近世小説の傍  
もまた遺漏ゆゑり——久出編不漏く方へ比承豹つ法あへんわ志者押本さう内猿編  
老権軒と墨跡一覽古事記の思ひよる向ふの書を下へて初ト

（）本居宣長著の新編の書が半下汗あせ一株あり充まつへて瓶くわく詫めぐ

機まの編めう上あの年と序じあるに  
トま  
めの風かぜをかくとあく事こと集あつてめう事こと添そなへしまく

首くわゆ。鹿塲<sup>かづら</sup>邊潭<sup>たん</sup>海<sup>うみ</sup>一話<sup>はなし</sup>て言<sup>い</sup>。我<sup>わ</sup>家<sup>いえ</sup>、城<sup>しろ</sup>の外<sup>ほか</sup>環<sup>わん</sup>海<sup>うみ</sup>也<sup>よ</sup>。首<sup>くわ</sup>ゆ。城<sup>しろ</sup>逃<sup>と</sup>走<sup>はし</sup>也<sup>よ</sup>。身<sup>み</sup>の外<sup>ほか</sup>也<sup>よ</sup>。身<sup>み</sup>を<sup>を</sup>身<sup>み</sup>集<sup>め</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>世<sup>よ</sup>すあり。身<sup>み</sup>よ<sup>よ</sup>新<sup>し</sup>也<sup>よ</sup>。身<sup>み</sup>を<sup>を</sup>身<sup>み</sup>を<sup>を</sup>持<sup>も</sup>て<sup>て</sup>況<sup>むしろ</sup>その<sup>の</sup>。

○余固ひうけん  
國年射見かへやへは撫みたゞらがを參考  
識者ひうけんの鑒定を以て精緻せんとせん家  
の本を薦すれど金匱の頃あらず  
へりやる事を顧みずある房の求るよにを草稿の後  
庸書かく裏割削みだ  
とせんとせん家大方の君子遺服を補ひ渡しを  
とせんとせん家

志學新編中蜀月吉旦

東都神田散人  
藤原北山忠定公

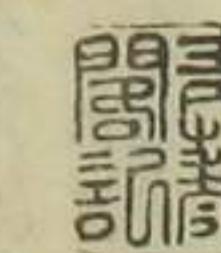


附言

東都市井の革事業の如きある旬日の間乃事と云  
やも忘失本筋つゝいあけ東都の人とりにあけ書ふ  
振りて往事を思ひ止む世努力の一端ともあらんあくま  
辞裁御官ふるゝとも坊間よ裨益あるの冊子あり

此編全貌ハ冊子天正十八年刊行すが承え年不詳  
序書落成はくとくも未割削の切符にて、費寳を急ぐ故  
今度初版四冊を以て布きほ後四冊はて費経せし矣

己酉孟冬　書肆　青蘋閣誌



武江年表卷之一

天正十八年庚寅



今年八月一日午後十時より戸の浦株へ入せり。その  
あろへ　浦株の辺革泥汎へ入せり。田畠もくづば農業  
も荒れ、ふくふくせりを考へ長手より始めて剥ぎ地をあらし  
川底より溝を堀。土石の石居を立てひり。一方せひ易の大都令  
とくあまうあらう。とくおのとく方民于戈の危きを立たせ。故復て  
狹いを極め奉る。浦泥澤尔治一を主計あり。また本やも浦く  
ねうらうあり。一中古とう八月一日を田の実と考へて。建前と云ひて。今年。浦村  
と。〇今年七月水害民政一家滅亡小田原廢城あり。〇車跡合考

御入國の後日尔折浦の鹽を江戸へ運送の為波地より船の通航を  
堵する事無る是今の事務の通ありとづくり 天文よりえゑのころより連より當主  
○八月平河天満宮 沖城内梅林坂とう 咲の年貢を納へば波地に岸すあまう  
○夏海勢のあ市をつゝ若狭船橋の邊け時へま 小鷹湯風呂一つを立てる  
風呂築永樂一歲あり皆人浴まんぢうふろ ひ拂きひ拂き 芝長見安  
○白鷹山庚申今ハト谷 小田原あちぢうけりうち が今年小糸家滅亡の後江戸へ  
來り今此時の位 の昌平橋の渡船を寢草庵を掌む 此時の位おを弗變和尚と以て後  
地らむとよま ○天正の頃算左東小糸波風間とりづゝ強盜あり黨を結び陣中下  
思ひ入て盜をあし然人を殺り今年とうゆをく逃退へ生喰ま  
経ま ふか  
小糸五代記

天正十九年辛卯正月閏

正月冥さゝハ列さへの法事業者きぎやうの御祭ごまつととて始はじて登のる  
○十一月さかづき冥さゝ東ひがし諸よし社しゃ小濟こざい冥さゝ附つき願ねがの御朱ごしゆ下げををぬぬむむ○赤坂あかさか一いツ町まち屋やがが  
○十二月じゅつづき冥さゝハ列さへ通用うゆうのの大おほ小こ刀とう小こ利りをを造つくりししややすす○は時代浪じだいなみ一い枚まい九く令れい

○小因こいんの靈風りやふう山さん種植くわうちち今いま年ねん移いだ町まちへへ移いだり後ご赤坂あかさか一いツホホへへ移いだるる

文祿ぶんろく元げん年ねん壬辰にんしん壬辰にんしん年ねん十二月じゅつづき八は日にち改元かいげん

御城の西北の地大法書組瓦宅地を多ら六組下から一書より  
六書までの名同あり とつ

○はるかに北を預け天正十八年小国領となりて以降今  
か浦町の北より寺院をみてまことに又順田町（移き明慶の弟後清と  
移さるもかのち院と云ふにテ）移きゆくりま  
波代の高峯も次第よほどへうきとを象徴城町の寃發人左司をちかく小栗や小辻  
一志の子あり父栗て後小田原藩去あり、もじ年十又才にてあり、家束の外抱  
きてはてより西郷の子のうちもよて居候。うちが城長の後徳城町寃基の子をもうり

二

友誼をひて廓をひしきり尚え和の件小ちりせり又小田原の豪家家臣四百を有  
友あ明人ふみ靈香とひよ服菜の三力を挿りトうか家あらひて後江戸を有り  
本町に丁向ふにて被せ業と作ひよ小大よ詮  
ありてゆむる今ハ代人の家アリ 製せり

文福二年癸巳九月閏

天正十八年の後島川へ寺代をゆきしろ／＼向照山法縁も。毎山英菴  
道二町度移る。天和三年清川。○隱窓先生は。始て江戸下り。中止篇にて  
載有。右僕をばす。自観政要を達筆。用版四景我有解のうふを  
と云。假りて東寧の邀遊ともよ。にまことら士家おれ陽田絶波を云々文ひ生せ。文集小  
見えたり。おれへ畠山は。隱窓和琴集。おとづらちく。時  
たうちあきやうくやうとあをゆく。ゆくも歎の月のをかの北  
○天正の頃常陸國、江戸清ゆりよふ。徳恩一羽。と云其法のゆく人  
あり。土子汎舟。墨間小熊根。彦葉角。と云て。ゆくを博く。よみすこ二人あり。  
徳恩重病の時。彦葉角のをかんを見捨て遂電。江戸へ。まことに。徹慶流。

昌資一派を起して勢力をもて一羽を  
之に乘る。病死する。昌子の昌角が事奉を受けて、追憶する。  
人の内江戸へ下りて、昌角を討つ。と後、竈をとりて小熊ふかゆ。  
小熊江戸へ顛く泥敷へ困よ止り、麻糬の社小熊角酒(さかづけ)を祈る。  
昌角江戸へ下りて文禄二年九月十五日日中禱ある。昌角より今  
より官府より出来を以て刀槍火薬を預り、ホ刀の仕合をやう。家  
より友人ホ刀を持て、之を合ひて昌角打負する。却て逐電(ちくさん)にて  
行方を失ひ、いとぞ、以上中東記の文を畧じて、尾菴(おとせん)の本草をうる八幡宮の額(めぐらし)と名書する家ありと記せり。今見えぬ。

九月千級大橋を始て掛ける。は北の橋も同不無時接続別島田彌院の記述より  
候事候あらう後ことをす行に冲流急橋にて  
橋柱とあるひあくまく橋柱倒まで船を壓し一船中の人がふ漂ふ候事候無時接続不

おとせ醜まことひ ○ 今べいご年ふ米穀豐醜ゆうあり

○ 小田原不老山壽松院今年萬代小役さもくれ今くわの船治橋の内うち虎とらをぬむる後年神田柳原の辺へ移り又濱原はまはらへ移る

文祿に年とし乙未

武藏小糸城たけし 先次と書よは武藏と  
渡河わたあふ少すくなき造つくりる ○ 小田原當知山本誓ほんせいち江戸えどより  
あひ日ひは谷桶やとう町まちの辺へ地じをぬむる後あとの喰町くいちの辺へ移り天和二年  
の後あと今いまの地じへ移る ○ 慶長けいぢょう國くに人ひと衆しゆ集あつ云い、丹町たんまちとて日市ひいちのあひふちひ  
さまで橋はし只ただ一いつあり足あしは渡河わたの橋はしあり文祿に年夏なつのあひうけ橋はしのりと  
あるの殘のこ橋はしを據すわせませま水原みずはらうちままりてあひーと

官府かんぶへさあさあくすまうけ橋はしを殘のこ橋はしとりふと仰あひくまきの船町ふなまち  
并そなへに日市町ひいちまちハ今いまの渡わたりの橋はしのあひうふををーーあるー

慶長元年丙申 七月閏 土月二十七日改元

一步い並なが小糸金始はじて通用うつりゆ ○ 六月十二日衆師衆しゆしゆ内うち昇東のぼりひがし法ほう山さん大  
羅だら又水免障もくじやう 五寸ごじゆ ○ 閏七月朝鮮あさひ人ひと來くわ破は ○ 同十二日大地震だいちしん月つきと逾よく  
止と止と ○ 渡河臺わたかだいを安やすくる ○ 多田宗玄ただむねとりふ人ひと靈告れいがををめぐりて京郊けいこう  
東山ひがしやまの辺へより葉附はつき像ぞうをねやり本庄ほんじょうお安やすに今いまの多田ただの葉附はつきあり  
○ 稲いな町まち常仙じょうせんち宗基そうき宗葉附じょうはつきを安やすと

同二年丁酉

鉢因不光深山感應せんぎょうも冥劍めいせん 安山あさん人ひともくはせんだ不除假ふしょと年とし

ちを延の今いま年中ねんちゆう不至ふしふ鉢因感應せんぎょうも

松平秀政ひでまさ也よ後ご別べつ也よ江戸えど渡河臺わたかだいの下したへ移いる 嫁實水よし年とし不

より今いまの海うみへ移いる

○ 八月三縁さんえん山塔さんとう上う守まつ日ひは若わかり今いまの地じへうくる まことろは今いまのやまとやまとのすみ

翁町の方より一とぞこの因をひや町とりするむうハ湖入の地小して漁人海中小校舎の竹を垂れ立て風のひるを防ぐを防ぐをひどりふらすか一人も海苔をくらふじとぞ用ひひきをまほにの役居の地あるひや丁とりへく後其はふうつきとてもひくや町と号一けり後り其はくあくまも野青町源方町至町もひ徳地方一とモ

○様に農養寺寔創 ○十月金鳳山高林ち波河裏ふ野す寔創あり

後年約此去お店へ移る

慶長己年己亥

二月 団

己月令圓山龍室天台祐因庵天台草創 寛永十二亥年

本來より寛永よりて以て此の寔創のち院號す小庭あくにとて太もとと拂ひ十

して一二を悉一との時へあくふたばり

同乙亥年庚子

小判玉光次と墨素書せしを極手に改くる光次ハ通葉の名すア

○六郷橋再植天台の名すア

○始て京於ふ然可代を許す○沈ト車門ち大塔建立

聖年五つ

全く成能也

同乙亥年辛丑

十一月 団

五月大小分判挺銀の形制を定めゆふ 波河江戸 判持とひふ 大意銀もげ財もり繋がる

○貞觀政要板流孔子家語武經七書板行せしめゆふ 波治世以來の刻本

○安南始て奉書實ふ永九年より通語石経東浦塞始て奉書實ふ永

之年の后絶ゆふや昌宗始て奉書實ふ長十八年迄今年より實承半百

まで二十三年のる洋船半船とて載ゆく商人亞馬港アマウチノヒスハン遷羅安

商昌宗ホの國く小年毎尔行て六商乘一班而半舟私乎行く商よ

奉年く不絶となり

以上至慶難

○十月十六日大地震房總の山を崩一海を埋立と波又海上俄リ潮引

引す二十餘町千鴻カミツルと廣三十七日潮大山のねく巻上流死難一

○十一月二日己の刻波河町章カミツルを更かむり火をかげ其大焼亡不江戸町

一宇も残らず人多く死むと早堀町冲至暮灰火事絶び序少告

板葺尔あひづたよ／＼官府より會せまゝ乃まで町中とく／＼板

葺少弐り而下院山跡次多情とし老猿人小房で家を保くんと云ふ  
海道表株さう羊を食みて葺後半をそばねて葺つて塔人ほほ／＼  
タツの本町二丁目の游山跡次多情を亦を羊を食みて葺つてさても  
既／＼大奇物也人をうびて異名を羊鬼遊山多情と云是は戸  
危葺の始あり 以上參也  
又葺集あが

慶長七年壬辰

左泥路て奉書も長十一年と ま處報  
往小か

○小石川無量山寺經ち序菩提ちと麻竹通院と号／＼殿堂傍傍寺清建  
立あり繁栄をあふ

同八年癸卯

今年江戸町割を命／＼すと其と長見の集木日本六十勝丹の人あと  
よせ仲間の山を崩さる今後河東の  
よせ仲間の山を崩さる今後河東の 東ああり 南の入海に方／＼千勝町埋させを家  
を立させあふと云 是より大名余沢の辺八代河内屋乃三河岸のき鞠町の辺坐木町を  
立させあはる所の町小竹の町ハ代田村の内あり大竹の町も代田村のうちもあり一と云  
る代田室田とも云ふ今の於に大木の辺あ／＼んとり／＼後田村の本石町浪町の辺之様田  
村の今之様田はつれ辺あ／＼一 む 備僧清造宮の附今之地へ移すれども一と云後町  
を古くゆか入の時屏風あ／＼よ 紳士よりて赤坂一ツの町底ふあ／＼ハ天正十九年の  
あるす／＼或古紀小豆えす／＼ニ河町に戸籍入り初ニ河底す／＼小人を石見山不  
不詔布の地を定めさす／＼小房も／＼もあふた時而を定めさむ／＼か玉す／＼は不詔布  
せ／＼後子町底を改り／＼と古名を立候ふニ河町と号するも云く候よ町と云く朝世  
左史の座當わ／＼と後かく候さむ／＼よ 紳士ふあり  
平川の村名あ／＼平川とりくる流あり今のは戸川跨せ橋筋よりあた橋のとの方より  
坂田町下魚板橋の西／＼一ヶ橋のか／＼東あの流自浪町波町浪町の方へ越く今のは浪  
波橋も木川筋あり／＼とり平川の流を隔て北の方仲田にせば近場もありふす／＼今のは  
斐やも赤坂ちかとせば清ふあ／＼と云もひく今のは 海城内美 海か廊の辺す社又う  
一あり平河天波え山寺社樂山御神體山御神體山御神體山御神體山御神體山御神體  
寺院院院院院院院院院院院院院院院院院院院院院院院院院院院院院院院院院院院院院  
院院院

御城地廣がりへて各代地をめぐらて  
御城からうすく後事ひ舊地をめぐらてあはれ  
うつゝとあり要へたひの辺古記よアヌえうきの里に  
彦橋集云町と善勝の傍へ只今の日を橋筋より乃之の岸をくわくらび  
モカテ支より傍へ堅塔横塔とも小出來ても揚古をあり篤小山のとく候よもくいを  
強ふより集りあつて町人を頼むとそ町を刻下さきひも村傍を次第おたの揚古を  
引ひ地形を筆者と題せん也あをはり表あつて先に彦橋あとひへと重巡へか心をつくり  
引ひ橋り始の後ち町を引ひの者も多くをうへてはふ善勝の主の者を救えまうてはるを  
はくはくことく町をあひ已後表不そりの暖簾一町の内ふ半らへいせやとよと付  
けられどありと云ふ  
車添合考ふた三河守  
市入岡の後村本町新と並んである  
後年武家屋あとありて東のかへりをもともの今のが木町もととありて町の事  
をいとひてあつたまき一もと  
をいとひてあつたまき一もと

あの時日本橋をもとめて撤へる因を定め大川あまきへ河津（あの方より）  
云頃を築（つき）て抜けぬよ後板のところにあります廣さにちろひとくえすあく  
又さあの橋活善（ごふしん）の時う日をまの人のあらまきて撤へる橋ありば橋のたわみを  
人あらまきて撤へる橋は天よりや降りんにとくわからん徳人一同小口か  
橋とよひゆる事（きこと）希代不思議（ふしきぎ）とほほせりと云ふ

○夏の頃　食事ありて九月廿日愛宕橋観社勧請あるべからる  
ます。○に月誓願ち鐘揚御建立（大附秋田）  
又度集会えり。○秋田山情隨意院秋田  
主小糸剣（寛山白）　及和尚

慶長九年甲辰  
八月四

二月日幸橋をりて宮城東浦道及越後陸奥等の他道へ一里塚  
を繰りてから三十六丁まで墨の猪突あり。右の方おへねを載りて是を度す  
也。○水樂殿の代りよ連にうそをあく用ひ。本氏の後半びく淡スナモウ食をま  
り。○千家一石を多めとがたえ。諸葛為信も  
して千家一石を多めとがたえ。諸葛為信も  
替られ。其家のうきひもあり。○又童山源寧も湯原小寢劍、宗山内巻  
靈門より

塔門の老翁を愛を感<sup>きらむ</sup>て和尚が告<sup>えん</sup>へ翌日幼鷹宮構<sup>もとづくらひあく</sup>  
の  
玄室を下<sup>さんしつをさへ</sup>り本堂回廊<sup>ほんじょうかいろう</sup>もまた奥多ありて大か堂とある方丈<sup>ぼうじやう</sup>

車添金考云故本黨の為被模の本を  
此時由遠營方へと云  
送るがふる事ふありてもうちとこりて  
○大城府普請小村押町の下に橋所用たゞよりもの辺の遊女原ともえぢ  
預ちる前へうづくま○此は代追ふ小道橋多くあらわる處即殺野魚  
○あ裏とくタバコ薔薇を渡し長瀬ゆゑく接ひゆくもよめてタバコを載る

癸亥年十一月  
丙午

大城を築たりぬニ二月より始り九月尔處就あり。あつて翌年紀後ち達正紀後より  
自ら莫福のか立てる者也。○置罷あやあや一御書某物とも觸る波止の役おとこ六  
年を免ぜられり。○置罷あやあや一御書。以い上系唐銀從なあく系慶云田源たねと  
の役をたゞ商取しょうとりへまわしに城并國彈ごんとう一御書。以下  
之等不詳り。○之番丹ばんたんのあまうとまく  
き候年とき未定。○十六州行實けいじを詔て枯かほる。○奉行昌清まさきよち二河稿こう兵後河臺だいとく移うつす。  
之ト十二月八日尔處築城ちくじやう作さく修止しゆ。○用もちひめと有あむが擣うすき。これを

立つる とひづ  
小東氏康の時冥を  
一統となり二殘丸を  
やめて長毛をえく  
或記云、承和統一要  
而、ふく承納の年貢  
承業ふ一せんの價を

とよりよ  
年の時冥を  
リニ残九年  
死をえく  
年一癸  
納の年貞  
せんの價を

小束は廉の防寒本中て永樂錢を用ひてと令せられびく錢を一方よりう天下に拂  
一統となりニ残充支て用ひあるとも永樂一錢のうちりふびくに又錢を加て奉る是不  
やめて長更をえらひ百姓安らかにむそ今幸永樂を止めり一ゆか來又代記より  
或況云永東錢一錢又合之あむと宣め合ふる所へ百錢は一錢つ除きては百錢とて今以  
て、ふ永納の年貢あくは送風ありびく而錢不見を移  
永樂は一せんの價を降て九十六錢をもとて通用もとづり

同十二年丁未

己卯

二月十二日より十六日まで  
所城のまへて觀世金春勧進能真行あり  
同廿日同前あるが雲の神子も國勅遣奇舞妓真行あり  
（見叟集小あらみ）  
（もく雲小村吉と  
りよ人の娘と云ふうき  
のま山東の骨董集ふべ） ○ 烟草袋州へひまうよ下ちまふを紙ふ  
（さとま） 始へをを刻て  
巻そて火を吹きけりと吸ひを便びませるを用ひて紙よ紙せんきせの製法の説を  
用ひ或は竹のラウを用ひ又木もきりのを下にすりきり透けせる骨もアヒスアリ  
○ 沖浦園自伝辛公序下向ありげ財柄善むを本母ちと改めひ部をかく

卷之二

東北の角田村あり。西にひづれの角田川あり。

○國に月朝鮮信使初來聘正使辰祐副使慶選達事丁好寛○八月八日客星現

慶長十二年戊申

林道春先生序傷寒小令抄入批註先生之續也

同十六年己酉

二月十四日月の宿方寺より現皇年代用堂小方形

月出滿沒如常

○七月爲深度蹴球を添して洋山主尚寧を游ひまつる

○八月阿葉院始々入貢奉書 唐船始々來

○烟草序割禁一役え和え○秋呂川海防筋山際より海防ます二年

乃附乃遙幅を度けゝき附還自はとあまつてあまつて

同十六年庚戌

二月閏

芸愛宗推現率社鮮敵關門石階木造建立因福ちもの時延立と和二年の丙辰送りひづれで今ハ紀行本始アラウラの御あつしとすうさ大屋アリスネトモ○銀町尔知院房建立後村院の同名あり

○七月十九日勅して坊上寺十二世貞蓮社源巻上人ノ善光觀音坐作の尾をゆふ○八月蹴球始々發府并江戸 海城ノ入貢主尚寧奉聘

○官醫吉田宇治率ナミヅカ草子宗達又良医ノシテアリ太橋宗桂も宇治う男アリね幕圓式一巻を著ヒ

同十六年辛亥

正月二日毫に蒲生侯傳落火ノ門尔仙人羅漢の形物ありて炎燐かまた

ありつら出時燒アツコトコ○蹴球聘役來○京に外耶蕪ヤマツチヨウ尔再發

○龍德山靈光院阿葉院房建立アラウラ町の○六月廿四日から猪肥後守清西率

○官醫養安流正母率ナミヅカ草子宗翁と島山城主の人アリ曲直瀬及二の門人ノあり援俸を給スル田小廣て別在小退居モ

慶長十七年壬子十月四

同十八年癸丑

漢又刺重拾く奉書○七月七日祚因社比至南行町始く津旅お  
あり○九月千葉家後続國を往來情心務とりよ人先祖お終乃捺あを  
牛脚並く寄迎も○十二月耶蘿宇の老淺系小號く除せらる  
○強盜勾漏裏内因ふ謀せらる御事元を敵の凶もひの刑罪也あひての様  
ありと

同十九年 甲寅

江戸町に川ありありと皆堀川あり 沿岸の塔をめぐらむが  
流る川是一萬本川ありあつて小舟門よりゆまび作田源井の氏子等  
山主権現の氏子なり

江戸より一里弱き流にて萬石ありけり作田山家の桜並木あり  
中畠城より御城城のやぐりを流きて永町へ延び流す橋又り  
波せうさきやも皆たまか橋ありたれどもかく橋も室東  
橋も以後から水の帝より日本へ勅使する數百人の唐人等  
來てゐるをありてあつてすくはねあふとて船坐  
とり組みを集めよし班流の上ふを底を拂り組みを限りあく  
入並ぬよし組み店のやうふ橋一つをうち支を組み橋とも付く  
の町を組子町とす

井の水一塙き一尺方民見をあげてのを牌みあり作田源井山家の  
名を永年の町へ流へ山中の流水を西南の町へ流へ二水を江戸  
町へあまねくあく

虎の脚門とく愛宕の辺因だよりす塙の樓の本ふ方幸もあり桜田  
のひ田の沖のあづれをさく川とひ今源助橋山門のあづりとそ  
残りくつとうや云く

江戸町繁昌故勅進能毎月毎日立り事ある一 小糸代記書云法太翁家、  
一絶句るるまー町立あひまにあひ度景に直面本草臺をうそれきと毎月  
毎日勅を放すて法太翁家一萬景樂の遊舞小奇令と度景を書ひあつて  
江戸町一大谷草平へとひの居風呂とひりのをくみあひ

見聞集小糸代記書云湯島天神神田明神貝塚山主権現  
桜田山主あご坊と吉祥も度傳す殊勅す東光院常寂寺教尊と

ありあられどももとまきナリ  
間うよわらひ○本日の寅士えいじ  
お霜一つあり 納波なは  
うちアリて莊嚴をす。六月一日大市立へ歸るといふ  
以上事々長圓寺の事ことふ不載ふしり  
字じを加へるのみなり

以上事又長安令之書事小不載

新京にあらずまゝ鎌倉河原八十石引渡し跡勅町とある大橋の  
内桺町ふれ附が慶長十年ふえ柳頼ち翁引紙は大橋は今の大橋  
橋もて桺町へ今の方に河原のあたりと云謂せ氣の寺源考ふも翁の  
後を參りて後まく足普通の役あまこと事合考今のかま橋奥見町の  
左葦沼の役入を織立ちて傾桺町とひそむれられたくして一方に少くす  
あの所例をすこ町の所例を桺町と名つま中一筋の通りと中の町と  
名づくと云ふもの況ふとれいぢきの頭付傾桺町へ至る橋の桺町又今

柳町もみ町ありと云く あびこ云ふとひよこのひもありーと云く  
おの所せ 風呂屋湯女ありわんに 見ゆ年年天正のひの湯湯のるを云て後  
わくあらの湯のあやゆき風呂屋さんみんの人あまくあらず  
のにトキふきうぬまき風呂屋をねまくらふらの町每ふ風呂ありびく十ヌ清け清つ  
みてかたなう湯女とりひてもまあけり女た世人世人あくひ所とあくさき髪とま  
ぐね又え外ふようちよくくじらひあくしゆまゆうじふやけりたる房とも湯よ葉よ  
といひておまう禁をほせうろをあく云くとあり高徳集み風呂屋江戸ふ  
あり朝と暮とく 晚は七時ふ辻舞臺のうち風呂入人の垢を流り湯女も七つ切ふ  
仕合すとくらべ身の支度を細へ善筋もよりく風呂のとくを引口一火を燈一升の湯女たる後をあくめせんとあじ  
ふくまく金の露風あとを引口一火を燈一升の湯女たる後をあくめせんとあじ  
小手やうのわをうしあれまめをせーと云く  
おの風呂やあ旅町邊ふも一二軒ありーと云く

○書籍を取ふ刻む事半ば始洋あるにて後半楷字大乗經の事本體不  
用ひ又えヌニ年法然上人造る所の選擇集を下板よりひ一卷もア完  
うされと歎する事火止罪ノムクテウ天正の頃迄の板刻の書物事  
あく之へうりておまえ長以來遊學の書を刊行一寛永の頃より復刊

常用集あとは手拂ひ一束と云ふは實に多う今へまく少數見る

書家方郊とりの貼を初めに實に墨の御代の一廢事ある

○好古日記云信手云筆瓶灯ハ豊臣公の時始て製し上下を板を以多  
編う板を用ひ其長以後のみ天正以前の瓶灯ハ筆と紙を  
貼して用ひ男山安居の頃の屋ふ用ひ者より送り裂きあり筆と紙を

幸中堂ある食庵

筆と紙を

筆瓶灯の如く山本の  
骨董集下

○二ふ味縫始て幸中道より筆の如くして京丹波城の庫  
源り簪若中小治とよすの深弘院より世よく一般尔糸づるも  
え和寛の頃あらべ○京丹波城の筆庵主安小西清平清等明人  
写すてゆうのを製し○京遊筆院云是又長の頃の風を古画を以て  
考ふる小男の改つき簪按くさき大手利或ち軍所若人ひ若ぎ

筆と残りて中判をつう何まし部の角を入て拂う筆の胸染  
て曲をぬく本とて衣被の廣袖もあり半身の被をとふ事ある  
まつ小器をつるめぬうこの被をもあつて見る財と是羽織ある  
べつがわがれも裂きもありて一樣あらじをやかふたの被を筆の  
辺をよせてこれを拂ふ事あるとあらむにかくあるわく筆の胸染  
あり絵と大きさと模倣せぬひ度たよ小被をそのうち付ふる一大形  
ある筆瓶を色さうふ澤するも而り編筆と扁きも長たもさぬ  
圓くゆき筆と革とび煙小被をたれかくして皆お絹を付革ハ幅大  
きそ蘇アモアリアヤアランとカク争うをお後不絶する處々見えざるハ旅  
りをやふ被とてあやまつた大小の手織を草ふ引通つてうつ被の  
男の旅筆あるもあつてつまし筆まとわふ被をあつて  
被の筆と

白く縫ぬい 立の刀をね又袴をりつ女めとよき人とかゝるが袴毛はらげをかゝれて  
つけ袴を衣の下さふる迄までとふ衣うろぎうろぎへり草くさへ男の革帽かみそと圓まん  
常じょうの女めの元もと袴を肩の上あふらりとすするよかく赤あかこゑふ萬まんつう袴はらたがハ  
もさげぬくよねて襟えりの後うしろすわり首飾くびの表おもてとてあやへ衣被いはうづき  
の衣被いはねねとあれとく一深ふかのころ小花ちいざなあとありよき模も様ようをく  
細ほそく色いろくもとをう色いろ駕かりかるう中なかふ小役ごくわくも見みるこれ  
練ねり緯緯 又深ふかるも有あべ一貧ひんの女めハ改かふりあもく長柄ながの傘ささ  
擔たるき又また色いろくの緒おを纏まつぐる袴はらを因いんへ足あしも衣被いは後うしろハ模も範はんたがり  
又女の笠かさへ布ぬの笠かさの下さふくろくろ布ぬのを二布にぬの合あて縫ぬいぐるを後うしろの下さふ  
尾おトまで下さまつるあり又また頭かしを笠かさの下さ頭かしのたたか肩かたのううまで  
さげさげるもかたもえき帽ぼうふをうつするもあり又また男の肩かた衣被いは模も範はん

あく小社のゆくうき合あて急役いそわくの下さふ模も範はんを満まつすり昔むかの武士士官へ文ふみ  
絶ぜつ妻めの若老人わかじんあど小こへ疊たまごトメタ天あま和わ貞じん寧ねいのじまくもまくすて珍めずら  
毛け後ごも被かぶく見みる又また袴はらせんせん萬まんつうもあく

元和元年乙卯

六月閏

七月十三日既

を田服たふく宿しゆく行ゆく社しゃ建立しゆり○六月十一日古田滅めぐ殺さつ正せい年ねん一役おく年ねん

庚申こうしん既

○六月十六日山生さんじやう浦うらを祓はらモ一株いち也始はじモ浦城うらじやう内うちのの大野おおの町まち方ほう敷ひら  
あくあくモモる御食ごしょく室しつも草加くさか町まち山裏さんり所ところへ買く入いり中なか地ぢ要いのむすすどりどり  
ひ地ぢのの御食ごしょく室しつも春日かみの原はらより山生さんじやう浦うら一附属いっありありてあらふ祀まつすすとき

○小石川向むか山さん権ごん現げん社しゃ勅てつ請うけ至いた高たか地ぢへ今いま御殿ごてん御ごの内うちあくあくとそ

兼かね高たか下さう今いまの地ぢ移いだ

同二年丙辰

祐因明神社祐因惣そくいん惣そく湯ゆノ移いだ○豫よ古明神外延門がい延門えん門もん萬まんつう今いま

載江年表卷之二

十四

西うつる〇二月旦立郡赤川村観音も奉手に河墓葬地のすま觀せし  
成り一もう十倍一丈八尺の泥佛を造り脇侍より納む〇二月吉日是處  
預ひよ付領地町の邊而つ蓋所下すと申すも此は算石町の末  
〇十月廿四日塙割并提を繕せし〇麻疹湯治アシキタケ  
○朝鮮人來聘〇羅山先生内反紀行アヘンキウ記引よりよき事あり是れ記載  
すまたとぞ人多く來訪もと申

○十月廿四日姫剣糸錠を纏せしも○麻疹流行  
○朝鮮人来鷹○羅山先生丙辰紀行  
けも大丈の白人ふ鷹を金を争ひりがややも人のりゆきうふ男女群集もやまの晴れより  
もゑく可えらる云くとあり庶民も観世音をいのこ今を承ふつうて三百二十八年の  
前あり今時の醫昌乃は徳あらす男ヘー事海食考も云寛永の既までから今の通町  
松並木也あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあ  
うんの内小繩をあわあわーとあん又寛永の既並木  
櫻ゑくあつて遊観のところとせらうりひづく

元和三年丁巳

正月十四日光殿山天池ち焼亡○新田山智母子情隨意流下谷池の端  
うるる万治二年冬の北へうるる○春月毛利勤之の後を承とり火起て嘗候燒亡年

は附見縁側序を先ずあり○胡解本首記誠一冊難い先坐編へ又寛永二年  
て廻のうへ不吉あらむと云ふ  
編もあり○町司甚を重下田系産  
初名を固 宮跡と傳へ遊女所ちよを以ふ集め瓦衝かわせ  
蕃庄町のまふじとあむ翌年十一月善達來りて舗を寧れ高麗室たかくらをきりあ  
志志野町と号し もろや宿もまば町警団する故まの役屋やくやを被りあよりまより一  
よりあ(町割をなまくせんを町と写)一宗町・喜戸町・竹見町さうの町  
大坂町・裏町・羽町なども村家を除く者をあべて板葺小形いたねつうきと又寺町を中ふ  
あそきあづかふ柳庄町と写一簇つむあくら敷あくら役町をコトブ居方義波の翁主屋を  
きをきく毎日かづをあへて足をかりせけりと申勅を義蕃<sup>ヨシハタケ</sup>蕃<sup>ハタケ</sup>拂子<sup>ハタケ</sup>角刀<sup>ハタケ</sup>降<sup>ハタケ</sup>移<sup>ハタケ</sup>  
ひらくさぬおさぬのあそびへて身みノハタケ  
毫毛無<sup>ハタケ</sup>澤名ハタケとちやぢとりふを奈良<sup>ハタケ</sup>安政<sup>ハタケ</sup>のゆあづうりーりの皆はももやハタケをき  
厚よこえぐるをもそぞくへりとそ盤に擧ハタケもえきを奈良<sup>ハタケ</sup>のゆあづひて擧ハタケる  
ありをもちうがけ<sup>ハタケ</sup>洞房<sup>ハタケ</sup>邊屋ハタケをもあわせ世人のあづみハタケとふ累ハタケは因書<sup>ハタケ</sup>ふ松女座<sup>ハタケ</sup>  
七軒<sup>ハタケ</sup>揚<sup>ハタケ</sup>古<sup>ハタケ</sup>に野町敷<sup>ハタケ</sup>み町方ニ町とありは附廊中十丈入<sup>ハタケ</sup>みよ海<sup>ハタケ</sup>を引<sup>ハタケ</sup>左衛門町  
とりとあり是<sup>ハタケ</sup>奈<sup>ハタケ</sup>橋<sup>ハタケ</sup>とよしとよ橋<sup>ハタケ</sup>もこの仄の々たうり是<sup>ハタケ</sup>奈<sup>ハタケ</sup>橋<sup>ハタケ</sup>と名づけ<sup>ハタケ</sup>これ橋<sup>ハタケ</sup>とつぶを  
きをかくはづくらひまつとまつとよしとよ橋<sup>ハタケ</sup>。もあてもあん橋<sup>ハタケ</sup>と名づけ<sup>ハタケ</sup>これ橋<sup>ハタケ</sup>とつぶを  
の方へまわてよきく今<sup>ハタケ</sup>の傍<sup>ハタケ</sup>へよへよとよまわすうきをく<sup>ハタケ</sup>轟<sup>ハタケ</sup>くを失<sup>ハタケ</sup>急<sup>ハタケ</sup>て引<sup>ハタケ</sup>と  
駆<sup>ハタケ</sup>無<sup>ハタケ</sup>席子<sup>ハタケ</sup>ふ持<sup>ハタケ</sup>拂<sup>ハタケ</sup>のうすを用ひ<sup>ハタケ</sup>まど編者のままでうすをあてようあつせ  
まほの思<sup>ハタケ</sup>象<sup>ハタケ</sup>鷹<sup>ハタケ</sup>今<sup>ハタケ</sup>のわくわく鷹<sup>ハタケ</sup>とまき<sup>ハタケ</sup>を拂<sup>ハタケ</sup>あふ拂<sup>ハタケ</sup>あふ拂<sup>ハタケ</sup>あふ拂<sup>ハタケ</sup>

元和丙午戊午

三月閏

三月庚午

癸未

壬午

○月漁事小  
○御城の邊より多大櫻因近焼矣  
○同自本初堂御再達十一面觀世音を安て東基山御名塔と  
あくま（中興尼山寺）  
算情（正徳）

同又辛巳未

夏とう冬ふりてか夜向氣をあわせ年の角のかく長歎十丈又  
華足をあわせて火止めや

○又月（正徳）八月まで大旱ス穀也（ひるひる）も多く死人

○大坂御主書源○長谷川某あくまの久保八幡宮燒肉（く

火の煙）御創始室中（まちゆゑ）（福）（九月十二日）怪寫先生卒

九十九才丙寅入林道春先生ハりも死なり名波乃田塾（にぎや）  
友不得菴松永昌ニニ宅寄齋（さち）よりとむ世子（よし）

同六辛亥申十二月閏

被取山普門院陽因川の邊より鬼戸村（おとむら）（二月十四日）後（代）  
光宗（こうじゆう）

○十二月二日始（はじ）て中興觀音（くわんのん）（七十七歳）

○漁事御見始（はじ）て達（たつ）（日本本體を蘇（よみがへ）る。お陰のゆえ蘇せらる。而  
直（ただ）はてか來（こ）れ（あ）る（な）る（を）或（も）  
日根方（ひねがた）日（ひ）そ（そ）（を）（す）（そ）（と）（お）（と）（て）（津）（よ）（ひ）

同七年辛酉

二月親世（おとし）一代能（のう）行（ゆき）を鶴所（つるしょ）東洋

○九月廿一日小塘（ことう）遠州（とおし）度（ど）と東（とう）渡（わた）るの腰（こし）とて御家  
川（かわ）のゆき（ゆき）酒（さけ）薬（くわく）と送（おくり）て（お）も（い）

あり（あん）と（ち）（ち）（わ）（わ）（わ）（わ）（わ）（わ）（わ）（わ）（わ）（わ）（わ）（わ）（わ）（わ）（わ）（わ）

○十二月十三日  
感國有樂翁年  
七十才近處の町をえぐりて町と云  
今トあり有樂翁ありてかく  
元和八年壬辰

元和八年壬戌

活所遺稿  
壬戌元日遇雪

雪隨世事正紛入  
閑座牕間東武春  
諸葛青蓮閑隻眼

笑而不答當時人

○十一月源通村に篠を下向ありて紀行を宣矣東海道記とてあり

卷之三

國之有司者不以爲急  
則其後或失之也

同九年癸亥八月閏

心口の役遠薄鄙疏邑除勅使事之小紙也

家を擱る○山川又曰初參白道晴遊志と人寂七十にタゞと人を世の處をも  
の見ゆあつて後人をみる

○其傍上ある山門津再び  
往田の地を擧て、立虎劍と櫻林と號す

世宗憲皇帝

女房の事はと極めやうに思ひ難い事ある  
事にても尚とよべり男へゆけたる  
事にてかのを ○ 東所一ノ因みに萬葉の文書通じて一二三尺又の幅を掛  
て置かれてゐるが、實ふるの如きの事あつてうへ  
集也

寛永元年 甲子  
二月 曜日改元  
まことに おもてのまこと

得勢の羅賓より長、度おに市以太和を以て、日暮橋通にて同  
多々可十年かあり今之次（廣原町せんざ）

○長寧の後年靈氣を感へて水代翁は精良を勧進せし四十年再

奥あり○日高村石初堂造再建○洋西把彌亞復東

○東嶽山寶水寺の御邊立岡山慈照大師より  
慈照院の御地作成の御あり一處西壁をすこと  
の御邊へて水くらのだのをかわりとすく小般堅勝院の今のお院の邊  
ありとげほ今之地を移す又比嶽山故ゆの  
名をうつして入笠村の町を板本町也

○道本山豊巖の毘列は時々云是巖の地に雄峯又巖と人仰

を守り拂邊を奉じて建立ありとあ

○明石志が久助寄本撰と号へて岩塙町をく晴天日興行に詔勅を

あるとく古今

ま擴太金貰ひ

○二月十八日より中橋造於て中村勘三郎と中村勘三郎

始むと奥行八丈の橋よりと

えね三月十五日御水橋をといひの御小中橋小殿と稱りとすめづりのせき居  
あり一事をりつ勤ニ帝與行のあうせき居りそりの御めでありとからず

○十月十五日小柄家篤時松屋院の廟宇於の二子廟に前よりて

向く消りよつて別れ源昌院の二子を山房とし

ゆく別院日吉院

○十二月朝鮮人赤鷹正使通政左文鄭豈副使通  
判妻弘實妻平昌

寛永二年乙丑

陽島小幡祥院創立天沢山幡祥院と改む春日の尾店善慶而ちり焉の寛永廿年  
癸卯九月十日述志也治二位

幡祥院に開不義大姫と号す

○あハ丁姫一丁因ふを一幡祥院高社ありとく御邊社の高社ありとく御邊  
つむる今年の春幡社へ幡えのあり一社を稱し高社のあくは不移  
○八月猪神一幡大工のつむるて二子大聖人安一子写山造一幡因みに  
候一子守ふ宮する

同二年丙寅七月同

龜戸大満文旗度寛文五年の御内侍一幡社  
造営に至るを居氏作社の切身

○七月十九日とて供坐昇殿○二東洋株馬在肇始

○耶穌宗再發 ○九月上野小

神祖拂宮門建立

高坐を取ては是をとつて或云東嶽山の  
燒鳥因羅庵と書せりす今もあつゝ

○十月吉至又町の赤く全、寄宿賑

すみ町も京橋のすみ町

○武帝忘耕農家除私福を以て實之承ニ年少一束の所賤行幸ありば時許祭

の御身をいた夜起を若きひ法事のつづふうをりてその財の人伊豆人や云

始一ト今ト云風流ある人ま

浮遊のことをあハーヴリとあり

○武帝忘耕農家實之承記を引て云實之承ニ年十一月十日鳥丸大納

光慶に由下向の序江戸源田町を至りあひて源平親王の古墳

あるを見ゆひて歸京の後勅勤の儀セターレハ勅免わん

事を墨聞りて同年十二月九月初免ありてから神田の社内小

まづりけることなく

拂之ふえ利二年延山中をの西辰紀以小神田社貢平親王の足  
をなむと記さるてアラホアリ延山中をの實之承記

能代小屋よりも

寛永丙午丁卯

二月源通村に拂下向あり

唐手陽詩山與雪

諸岳和尚へきし

紫雲の色下へさむとくま紫の紫の紫の紫の麻あ川のとも

○東嶽山に至門常以坐法華堂ニツモ經坐多宝塔等拂建立

は附塔室  
室塔

○四月八日吉慶賓山権現社火祭後再

は造當有

○八月波久

○大地震○十一月塔伽沙古木原理伽ト云

あんら

○新羅とう琉球へ渡り一而凡

の經薩州始々の後も主と南う編の新樹子小馬丸に二十年來の主と

あまたに波多也太万治實之のによりまつた

名号を書して主と下拂を立て

聖母月藏正寺と云

同又年戊辰

正月二日京橋紀伊垂庭又主とりの元末無事あり一ト大師

河京弘法大師の示觀を蒙り六字の名号を書ほりて二月廿一日

名号を書して主と下拂を立て

聖母月藏正寺と云

○三月廿日 柳營<sup>ヨウイ</sup>お於<sup>アリ</sup>御連寄會あり 足深<sup>アシマツ</sup>也運寄會の始りありと  
○五月廿二日入岩西覗<sup>アリ</sup>聞山處育禪<sup>ヨウジン</sup>昨夜<sup>ヨロシキ</sup>三日思<sup>シメ</sup>候より來り一人なくす  
○一刀流小野派劍術祖小野次郎左衛門率<sup>アリ</sup>其<sup>ノ</sup>改<sup>ハシメ</sup>の少<sup>シ</sup>子上興<sup>アキ</sup>居ゆ<sup>シ</sup>り  
茅<sup>ハシメ</sup>の後<sup>ハシメ</sup>是<sup>ハシメ</sup>小姓<sup>サムライ</sup>也祖又<sup>ハシメ</sup>之<sup>ノ</sup>を傳<sup>ハシメ</sup>て小姓<sup>サムライ</sup>也改め<sup>シ</sup>る  
○所<sup>ハシメ</sup>近<sup>ハシメ</sup>城<sup>シテ</sup>○十二月十日官医<sup>ヨウイ</sup>今大路道<sup>ヒシタチ</sup>二率<sup>ハシメ</sup>半<sup>ハシメ</sup>ニ  
小居<sup>ハシメ</sup>○近<sup>ハシメ</sup>戸下向<sup>ハシメ</sup>の記<sup>ハシメ</sup>あくま<sup>ハシメ</sup>時<sup>ハシメ</sup>の向<sup>ハシメ</sup>むさ<sup>ハシメ</sup>時<sup>ハシメ</sup>名<sup>ハシメ</sup>ころた<sup>ハシメ</sup>は安<sup>ハシメ</sup>士<sup>ハシメ</sup>の靈<sup>ハシメ</sup>

寛永六年己巳 二月閏

六月上旬<sup>ハシメ</sup>より同里<sup>ハシメ</sup>村<sup>ハシメ</sup>新<sup>ハシメ</sup>之<sup>ノ</sup>然<sup>ハシメ</sup>於<sup>アリ</sup>城<sup>ハシメ</sup>也<sup>ハシメ</sup>而<sup>ハシメ</sup>像<sup>ハシメ</sup>  
近<sup>ハシメ</sup>戸中<sup>ハシメ</sup>老<sup>ハシメ</sup>も男<sup>ハシメ</sup>女<sup>ハシメ</sup>群<sup>ハシメ</sup>集<sup>ハシメ</sup>○七月廿七日玉室<sup>ハシメ</sup>澤庵<sup>ハシメ</sup>の<sup>ハシメ</sup>死<sup>ハシメ</sup>と  
流<sup>ハシメ</sup>さる<sup>ハシメ</sup>近<sup>ハシメ</sup>庵<sup>ハシメ</sup>羽<sup>ハシメ</sup>衣<sup>ハシメ</sup>上<sup>ハシメ</sup>の<sup>ハシメ</sup>山<sup>ハシメ</sup>玉<sup>ハシメ</sup>室<sup>ハシメ</sup>の<sup>ハシメ</sup>奥<sup>ハシメ</sup>乃<sup>ハシメ</sup>僧<sup>ハシメ</sup>と  
後<sup>ハシメ</sup>方<sup>ハシメ</sup>より<sup>ハシメ</sup>て玉<sup>ハシメ</sup>室<sup>ハシメ</sup>に<sup>ハシメ</sup>月<sup>ハシメ</sup>近<sup>ハシメ</sup>庵<sup>ハシメ</sup>の<sup>ハシメ</sup>源<sup>ハシメ</sup>流<sup>ハシメ</sup>罪<sup>ハシメ</sup>せ<sup>ハシメ</sup>る<sup>ハシメ</sup>ベ<sup>ハシメ</sup>ク<sup>ハシメ</sup>リ<sup>ハシメ</sup>一<sup>ハシメ</sup>人<sup>ハシメ</sup>も<sup>ハシメ</sup>あ<sup>ハシメ</sup>り<sup>ハシメ</sup>て<sup>ハシメ</sup>は<sup>ハシメ</sup>月<sup>ハシメ</sup>の<sup>ハシメ</sup>あ<sup>ハシメ</sup>る<sup>ハシメ</sup>て<sup>ハシメ</sup>奥<sup>ハシメ</sup>の<sup>ハシメ</sup>地<sup>ハシメ</sup>井<sup>ハシメ</sup>底<sup>ハシメ</sup>也<sup>ハシメ</sup>

近<sup>ハシメ</sup>庵<sup>ハシメ</sup>源<sup>ハシメ</sup>一<sup>ハシメ</sup>渴<sup>ハシメ</sup>を

是<sup>ハシメ</sup>別<sup>ハシメ</sup>を告<sup>ハシメ</sup>て曰<sup>ハシメ</sup>

天分南北兩鳬飛 何日舊栖<sup>ハシメ</sup>同翼<sup>ハシメ</sup>歸<sup>ハシメ</sup> 聚散無常只如此<sup>ハシメ</sup>

世情禽<sup>ハシメ</sup>亦有<sup>ハシメ</sup>福<sup>ハシメ</sup>機<sup>ハシメ</sup>

玉室額<sup>ハシメ</sup>を和<sup>ハシメ</sup>て云<sup>ハシメ</sup>

草鞋竹杖與雲飛 舊院何時把手<sup>ハシメ</sup>歸<sup>ハシメ</sup> 水遠山長猶絕信<sup>ハシメ</sup>

別離今日已<sup>ハシメ</sup>機<sup>ハシメ</sup>

八月十五日近<sup>ハシメ</sup>庵<sup>ハシメ</sup>完<sup>ハシメ</sup>上<sup>ハシメ</sup>小<sup>ハシメ</sup>房<sup>ハシメ</sup>

究<sup>ハシメ</sup>川<sup>ハシメ</sup>不<sup>ハシメ</sup>開<sup>ハシメ</sup>千<sup>ハシメ</sup>月<sup>ハシメ</sup>也<sup>ハシメ</sup>流<sup>ハシメ</sup>さ<sup>ハシメ</sup>き<sup>ハシメ</sup>て<sup>ハシメ</sup>あ<sup>ハシメ</sup>ま<sup>ハシメ</sup>は<sup>ハシメ</sup>せ<sup>ハシメ</sup>す<sup>ハシメ</sup>む<sup>ハシメ</sup>ひ<sup>ハシメ</sup>も<sup>ハシメ</sup>か<sup>ハシメ</sup>近<sup>ハシメ</sup>庵<sup>ハシメ</sup>  
名<sup>ハシメ</sup>ひ<sup>ハシメ</sup>き<sup>ハシメ</sup>あ<sup>ハシメ</sup>こ<sup>ハシメ</sup>よ<sup>ハシメ</sup>ひ<sup>ハシメ</sup>の<sup>ハシメ</sup>月<sup>ハシメ</sup>と<sup>ハシメ</sup>ち<sup>ハシメ</sup>の<sup>ハシメ</sup>く<sup>ハシメ</sup>の<sup>ハシメ</sup>わ<sup>ハシメ</sup>こ<sup>ハシメ</sup>や<sup>ハシメ</sup>の<sup>ハシメ</sup>ね<sup>ハシメ</sup>の<sup>ハシメ</sup>う<sup>ハシメ</sup>ふ<sup>ハシメ</sup>う<sup>ハシメ</sup>ん<sup>ハシメ</sup>と<sup>ハシメ</sup>ん<sup>ハシメ</sup>全<sup>ハシメ</sup>  
二<sup>ハシメ</sup>原<sup>ハシメ</sup>流<sup>ハシメ</sup>罪<sup>ハシメ</sup>の<sup>ハシメ</sup>よ<sup>ハシメ</sup>く<sup>ハシメ</sup>ハ<sup>ハシメ</sup>近<sup>ハシメ</sup>庵<sup>ハシメ</sup>萬<sup>ハシメ</sup>度<sup>ハシメ</sup>を<sup>ハシメ</sup>ア<sup>ハシメ</sup>ス<sup>ハシメ</sup>ト<sup>ハシメ</sup>か<sup>ハシメ</sup>う<sup>ハシメ</sup>べ<sup>ハシメ</sup>この<sup>ハシメ</sup>時<sup>ハシメ</sup>  
仙洞<sup>ハシメ</sup>の<sup>ハシメ</sup>内<sup>ハシメ</sup>う<sup>ハシメ</sup>く<sup>ハシメ</sup>ア<sup>ハシメ</sup>リ<sup>ハシメ</sup>月<sup>ハシメ</sup>

至<sup>ハシメ</sup>く<sup>ハシメ</sup>多<sup>ハシメ</sup>升<sup>ハシメ</sup>海<sup>ハシメ</sup>の<sup>ハシメ</sup>店<sup>ハシメ</sup>も<sup>ハシメ</sup>の<sup>ハシメ</sup>家<sup>ハシメ</sup>も<sup>ハシメ</sup>か<sup>ハシメ</sup>う<sup>ハシメ</sup>き<sup>ハシメ</sup>て<sup>ハシメ</sup>の<sup>ハシメ</sup>下<sup>ハシメ</sup>か<sup>ハシメ</sup>う<sup>ハシメ</sup>り<sup>ハシメ</sup>の<sup>ハシメ</sup>月<sup>ハシメ</sup>

ひこう民なるのね平小

江戸喰物ニ倍を二まうすりてアモウハムミトマモタラリのとる江戸

○今春とうり武家とヒ番を立る場所よびては斬あり一旗とを

寛永七年 庚午

正月八日陽田川より

古塚のちアハ柿ノ木アヘリキモトモも首へも脚へ

お腹を保

○二月十日日暮師甲斐速車率百十七ヤシリヨリクミの車をもて速り一や作  
速キ一役十六箇と候アモキリ○二月小溪誕生寺豆吉彦の名をもすあがめもくろひの  
と名著述の医者を楠木寺モテ先去○二月小溪誕生寺豆引祖师  
像外以事奉すアモ○二月二日身近久遠トモトモシ日還北と奉門寺

同樹室瀬日樹伝召飯田小配流○六月院跡人來聘

○同サニ有大地農毛海○八月山王社法造嘗

○魚鱉ギョウラ觀世考ニ田の地お安を並田山法考上人モ前田主  
並う勢(き)りふ

○十二月廿三日大比農試刻光為先行アシナガヒモドリ

同八年辛未 十月國

三月十九日江戸冲不灰陣○同廿日諸國耳露陣スルコ

○四月二日流革アラカモテ上○去年とうり今年モテ六十石波麻廢ヒゼン廢ガミを病  
む老父アラカ○東嶽山ヒカル大佛像オガ造立あり造立螺巻庚泥カネを拂ハセキモセし  
チ額剥ハステ碑モを後清水櫻スルシロ名第賞速○八月大風家底スルを壊ハセチ樹木  
を折ハセ○十月灰陣○十月十二日後夏氏又代速無事ハナシ

○十月十七日上野大石燒鶏立佐多守大石燒鶏等之と  
明治十九年一丈八尺余

同九年壬申

諸家深秘諱アシナガヒモドリ今春とうり奥尼仙臺の茶穀始アシナガヒモドリ江戸アシナガヒモドリ今  
ア江戸アシナガヒモドリ奥尼室のぼり至所令アシナガヒモドリ正月七日正月詔アシナガヒモドリ

○中村勘三郎を居候中橋より移宣町へ移り今の人形  
○草薙籠籠波云 寛明日記寛永九年の件より金貯てあふ舟詰車  
如船也とまことに初うら八十女の内和と見えり

○玉宝櫻店二師滿處とうに還りもひ七月廿七日は腐りゆす  
作田の廣徳ちよ寓ひたる冬櫻店へ移込塔氏不寧居候至年  
二作を大種玉屏せりめり 次年元月十日年賀布下寓居す  
一尺不居を勧めて檢束庵といふ

寛永十年癸酉

上師弘法林道春先生別荘不先至般を達し 尾筋宿邊乞はせ  
原山を載りまつてなり今山の山のふ 携き置きと云はざらる  
なり事の筆文集探察記ト洋書○正月廿一日廿二日就國大地震小田急の  
別きを拂へ同廿六日申刻大地震

○武井氏の株序篇城とあり——今松平宣城より誠書

面く近戸へ歸宅地をゆきて不を愚所亦愚町とよる

○七月十九六月まで波多○あはる町三千圓の小川を埋め町底せ  
せらる○都得内を居候先ありて奥河口 未詳

同十一年甲戌 七月間

正月十八日塔上寺方掌上人念佛三昧にて深縁より案興の後  
身骨寒く舍利とある○二月一日 御塔より身骨を移入  
詮因をゆるよき青洞を掘り身骨を納りけり——或記

身骨をアリ○三月九日移築塔大檜堂木檜草ハナカ

久保八幡文 因是正勤堂寺拂造営あり はるも由井

○呂川妙心寺奉坐みま接二王門古事記

○平塚明神社拂縫立松木至く滅絶しめつせき  
○西年とう山生活室禮清り大を禮と極る  
○室林山巻玉も稲町代地とうて写谷とうたま  
○七月疏球人東聘にしゆうけい西使佐敷主食さしき市村羽左衛ひざわ○村山又二郎せき居幕底町行  
旅たび姫子奥おく市村羽左衛ひざわ○八月八日或る夏の店家の室居間法  
歎あかんをあゆみひ後ご今日終えて拂はな去はなむをを  
憂おもす老おとこを祈さうげれ無なあべーと聲こゑひゆひゆ飯めし食くまち玉墓たまあり今も  
○明人安計あんけい後炮こうばの江戸日年榜安計町をぬもり又舟丹ふね二浦逸見村を  
頤よも妻妻始満厄まんやく今年七月十六日後逸見村岸がん上じよう横墓よこあり  
安計あんけい忌日ひ墓碑ひ寫はしてあつと  
寛永十二年乙亥

正月廿五日寅卯刻大地震だいちん午未刻又大地震だいちん○酒販出しゅはんを賣う始はじ  
○春鳥丸大納立光磨こうまの室東面下向あり此の記を春の曇くもりよ  
成世せいせいの音おと不向むこうありとと又源通村もとむら下向あり  
内庭うちの門もんありとと又えりえり又源通村もとむら下向あり  
春鳥丸の禁きみもううのむきむき一時ひとときあますてうるる春のあたり  
○安定期あんじきの拂船修はいせん葺そてとう來くわる一派小寶永十一年とも云い柳川町の邊へ屋やを有う  
之聘しほもく止と又向むこうもよつちよつち天和てんわ二年に年と此款この解わかりわからぬぬ○二月天台龍寶寺りゆうぼうじも名淨めいじょう今寺いま河原かわはら寺てら  
深草ふかくさへ移うつる○三月朝鮮人東聘じょうせんじ也田舍出いだ門もんの内うち所ところ  
○六月十二日大風遠呂良夏冲海うきの船ふね八石破損はいそんすす  
人墓ひと○八月茅场町ササ原ささはら本安ほん立たつ  
恒つね上じよう○八月茅場町ササ原ささはら七十七しちじゅうしち○堺町天あま一丁いち薩麻さつまを立たつ

正江年譜卷之二

母の幕を巻き戸の上に張り衣裳結構とて又亭宿泊  
老の夜歌より義と云ふ者と化ゆる所が其の本體也

寶永十二年丙子

高田元日は月○家内○子孫を繁昌せし○高田は八幡宮勅請の爲  
の御祠を奉る事無く家内○大城御内原也塔見附柳原御善徳をあらわすの時  
やと遡く内造官有  
御塔迎神社も虎所の稱也

只に人さへあらずかにあらうとありこの店舊事の間を算より年車牽車  
りとも年車の手取て市役ハ情えのああてに丁度の代をやめたり所用のゆ  
きりて後はまよ止み實を承十六年  
まよもひく今牛町をなむといふ

○四月尾月後夜六代紫雲車 十三  
○五月六月のち又小山所へ 由雲山也大野紀昌主事  
○南風にて通写す事九度

○内閣文書局印  
南洋支那通商手帳  
しせん  
内閣文書局印  
南洋支那通商手帳  
寶永通室  
六月四日より通用始是  
と書く  
大正九年八月四日

はまくわくとての風景とせきふくとて海さくらのせきの風景を絵てゐるが  
此の海草もとより人ほし事を司らとりよしも此江戸坂本もおがいに村おこしとて  
腰かたひそく坂村もおがいとて海さくらの又おもじまとてお角せりとお花にあすき満ち  
の懶惰を修止せりもゆふととて出か翁云古稀の世なるすり流形けり形聲く文滅  
完全をありの物一今江戸の實を承通宝鑑災里厚福郭周正孔歎う而謂洞を惜  
ましくて心を憂まするなりと云く實を承通とせまく、度く満門と云く度々大小  
形狀その邊ひあり無弘義貞う實を承通講ふを圖と極一その況を參けて

洋あらば車輪を以て  
さまざまの世子に稀あり

○十二月朝鮮人來聘

正使白蠻任統副使東瀛令世濂  
從事青丘莫床 旗鼓布勢方丈人

正江年表卷之一

